觀世小謠集 全

552

256
226

宗家觀古之印

昭57 3
552

小詣

目次

高砂 一丁
江口 二丁
鶏飼 三丁
葉平 五丁
辛都婆小町 六丁
老松 七丁
井筒 八丁
天鼓 九丁
實盛 十丁
玉葛 十一丁
養老 十二丁
采女 十三丁
竹生鳴 十四丁
姨捨 十五丁

田村 一丁
雖波女 二丁
千手 五丁
紅葉將 六丁
賴政 七丁
三井寺 八丁
白樂天 九丁
楊貴妃 十一丁
融 十一丁
清經 十三丁
通小町 十四丁
朝長 十四丁
柏崎 十五丁

明治
43.11.16
内交

阿漕 十六丁
鷹 十七丁
梅枝 十七丁
犧通 十八丁
熊野 十九丁
蓑戸 廿丁
景清 廿一丁
二人静 廿一丁
加茂 廿二丁
松風 廿三丁
浮舟 廿四丁
八鴻 廿四丁
葛城 廿五丁
海士 廿六丁
志賀 十六丁
大原御幸 十七丁
誓願寺 十七丁
忠度 十八丁
遊行柳 廿丁
玉井 廿丁
杜若 廿一丁
安達原 廿二丁
俊寛 廿二丁
西行桜 廿三丁
呉服 廿四丁
鸚鵡小町 廿五丁
當麻 廿五丁
鞍馬天狗 廿六丁
定家 廿七丁
東岸居士 廿七丁
夜討曽我 廿八丁
隅田川 廿八丁
春日龍神 廿九丁
源氏供養 廿九丁
富士太鼓 三十丁
通盛 卅一丁
櫻川 卅二丁
氷室 卅三丁
芭蕉 卅三丁
舟弁慶 卅四丁
女郎花 卅五丁
自然居士 卅五丁
咸陽宮 廿七丁
龍田 廿八丁
夕顔 廿八丁
雲林院 廿八丁
松橋 廿九丁
花筐 三十
皇帝 卅一丁
檜垣 卅二丁
山姥 卅二丁
善界 卅三丁
百萬 卅四丁
右近 卅四丁
閑寺小町 卅五丁
大會 卅六丁

三輪 廿六丁　安宅 廿七丁
東北 廿七丁　蟬丸 廿七丁
猩々 廿七丁　白髭 廿八丁
盛久 廿八丁　佛原 廿九丁
善知鳥 廿九丁　小塩 廿九丁
邯鄲 四十丁　殺生石 四十一丁
野宮 四十一丁　錦木 四十一丁
唐船 四十一丁　弓八幡 四十二丁
鉢木 四十二丁　羽衣 四十三丁
竜虎 四十三丁　芦刈 四十四丁
敦盛 四十四丁　木賊 四十四丁
葵上 四十五丁　輪藏 四十五丁
濱覽 四十五丁　江野鴻 四十六丁
代主 四十六丁　九安戸 四十七丁
逆矛 四十七丁　西王母 四十八丁
道明寺 四十八丁　經政 四十九丁
籠 四十九丁　巴 五十丁
嵐山 五十丁　正尊 五十一丁
卷絹 五十一丁　鐘馗 五十一丁
項羽 五十二丁　橋弁慶 五十二丁
熊阪 五十二丁　小督 五十三丁
野寺 五十三丁　張良 五十三丁
羅生門 五十四丁　鉄輪 五十四丁
藍染川 五十四丁　雲雀山 五十五丁
住吉詣 五十五丁　谷行 五十六丁
半蔀 五十六丁　禪師曽我 五十六丁
車僧 五十六丁　吉野天人 五十七丁
大佛供養 五十七丁　忠信 五十七丁

烏帽子折　五十八丁
鶴亀　五十八丁
大社　五十九丁
春榮　六十丁
土蜘　六十丁
小鍛冶　六十一丁
合浦　六十一丁
草紙洗小町　六十二丁
松山鏡　六十二丁
大江山　六十二丁
知章　六十三丁
戀重荷　六十四丁
鷺　六十四丁
七騎落　六十四丁
大瓢箪々　五十八丁
和布刈　五十九丁
東方朔　六十丁
第六天　六十丁
舍利　六十一丁
石橋　六十一丁
生田敦盛　六十二丁
六浦　六十二丁
金札　六十二丁
岩舩　六十三丁
俊成忠則　六十三丁
碪　六十四丁
望月　六十四丁
弱法師　六十五丁
絃上　六十五丁
放下僧　六十六丁
龍太皷　六十七丁
宝君　六十八丁
身延　六十八丁
飛雲　六十九丁
須麻源氏　六十九丁
松虫　七十丁
三笑　七十一丁
藤　七十二丁
歌占　七十二丁
土車　七十三丁
國栖　七十四丁
繪馬　七十四丁
淡路　六十六丁
吉野静　六十七丁
錦戸　六十七丁
碇潜　六十八丁
枕慈童　六十八丁
放生川　六十九丁
胡蝶　七十丁
一角仙人　七十一丁
鳥追舟　七十二丁
水無月祓　七十二丁
雨月　七十三丁
攝待　七十三丁
雷電　七十四丁
現在七面　七十五丁

照君　七十五才　仲光　七十六才
梅　七十六才　高野聖　七十七才
菊慈童　七十七才

高砂

何せ高砂の。尾上の松そ年ふりて。老乃波もよりくるやと。
末乃ハ下葉の落葉かくなる迄。
今ハあらくて。程いつまでかい
きの松。うれそ枯くき。名所
かな

同

四海浪静まそ。國そ治まる時
津風。枝をあらさぬ御代か
きやあひよ根生乃。松そう
めでたのきれ。実やあらざく
そ。こゝも愚やかゝるよふ。ちあ
る民そ豊ある。君の恵ゝ

有雅

同

高砂や浜の真砂は尾の上の松の緑も春の風吹く

月清き夜の海の波の音は千代の響の音ぞ聞こえる

田村

白雪の降りしく山の桜花雲かと見るまで風の吹くらん

きべやへ一重ぎよ九重の奥の宮なよその山ぶきの花の

時ぞと言ふ。乗合の乗れ

同

今宵は其名を流せる清水の

深き誓ひを数へよ手の内の手

ひとりぐ様ぐ乃ちちひ普く

て。国土萬民をもらちぐれ。大

悲乃歌ぐ有雅さ。哀や安楽

世界より。そ汲楽を示現

て。我らぐ為の観世音あらぐも

愚。城べ

同

もとから。散や桜乃陰を居

く。花そたくある法乃場遠

ぬ月の光と世を。汲を。経を。讀

誦もまく

江口

ちぐ。こそ。惜まぬ假乃宿

るを。あどや惜むといふ浪の。のがらぬいのちへ今ぞとくを捨
べ乃世語よ。心あらめ給ひつ

同

この舟を。やめて逢瀬の浪まくら。うき世の夢をゝんなら乃の
琴うぬ。ぬれ乃れけ。さよひめ
柳ぞ。行敷袖乃濡れ
唐土ぬ乃名残ぞ。ぞ
治乃橋ひめそ。そんせを人
を待そぬ乃上と哀ぞ。
手習れ。や芳野の花そ雲
も雪そ浪もあをれ。世よなの
ぞや

同

うとへやうとへうとかうの。哀昔
乃高ぞを今そ。ぬ乃舟
掛ひよを渡るとふを
。いざや掛ぐん

班女

心だよ。真れ道よかがひなば
れらどでも。神や寄らん秋
お逸。高ぬの月をくもらで
ちらで待へし人心。夜の玉い
有ぞら。恨ありやとも
狂同じと。祈るぞ

同

夏ハつる。扇と秋の白露と。仔

先よ主殿乃床絵や獨り
の。ぢひ、き枕して閨ぬ月を
あかめん

同

秋乃の扇より。狂うれてあ
るあい人心ありまるぞや。あ
とい宝ごとやあめぞう意ねそ
みあをを

鶉飼

ほとおうまきまゑのわざと
今い老鶉をくゆき。ひ浪
間よ移ぶこく。墨袍をあ
叶ぬ命つんとそいとあ
わぎのあうさよく

同

浮瀬乃石をむろひあげ。妙成
法の経を一石よ一字。出づきく
浪間よ沉め弔らん。ちどらう
海ぢるびきく

難波

祝ふある。やう考るき髪あさ。あ
まつ日ぬさ乃出調拙をぶち
まるや紀路の真ある代をあ
ふぐもと。南乃戸ちでちきと迫
あまくく嘶乃。日影部

同

難波津よ。咲やこの花冬ごそ
すく。今い奥べよ匂ひきて。

きぶ梅の風。枝をあらそぬみよ
とうや。実や津の國のおふの乃
みよ至る迄。豊ある世の御
こそ。実道廣き。治めあれく

同

ゆたかに豊年れ出謝物。ゆるゆる故み
やあくいやまさ。みそこぶ佛
寶乃。ふ秋萬歳乃。ちかろむ
を左くまつる

同

栄えさうる津乃國の。強波
の梅乃名ゆ。わ。匂ひも四方
ゆ音く。花ひらくれで天下皆
真あれや万代乃。祥安全ぞあ

で、たき

萬年

豊いまふ。浮世をわくる栄乃
手れぬ袖そ。れまき掉せ。
きぬ人なれど。法乃人まで
海きそ。船をばいそで惜むべき
ゆくめまじくく

同

露を汀數芝遠。日も暮ぬ了
そ成べ。栗津乃原恋衰去
のおぼ陰いぎや。弔らもんく

千手

陸奥乃。恋ぶ。攀ぬ女の音。
降りもさくる折そへ。思

ひの露そ。散ぐさは心はた花も。去
ねくとも。先ほるる袖の色まぐも
きぶの名乃。たゞ〻ひれく

同

上毒円、妻戸をきるゝし押ひらゝ。み
もの追風匂ふくる。花の都人
よ。たづゝ〻ぐりみゝえ受。宮や
東の果〻。遠。人の心は奥深さ
其情社ぞあるき。花の表紅葉
は秋。たゞ思りでとあり。

同

上毒円、思へ乃。世ハ空蟬乃唐衣きろ
ゝ別れ〻妻〻ある。都乃雲井
を立ぬ。遠ぐきぬる。接を〻

ぞ思ふ裏へのうきうの果ゝ也
しき。永ゆく川の八橋やくそで
よ。おを思へとハ。かきぬ情乃中
ゝ別るゝや恨成袖く

卒都婆小町

上毒、かう海ゝ。霜蓬をいくでき。蝉
殆たり。両鬢もたゝべよかき
てもえみゝれ艶ゝたり。雙蛾
そ青山は色を失ぬ。百年ハ
ひゝゝ勢たらぬつくもかゝ。
おもひを有明乃歌をうゝき
秋永部

同

下円、是よつきてそ、はの世を。ねの

みるまてこゝかきる。はたを塔とかき移く黄金乃をくへこまやら
よ。花を仏よ手向つ。ちとりの
みちよいらうよ〳〵

紅葉狩

上、実や音信よ。風のかをるまつ
らみへ。流きもやらぬ石城をも
ぞこらへ錦中絶んと。まつこの本
よ立よりて。四方乃梢をあゞめ
て猶やもゝ繰へや

同

上、まゝらをぞやらけ心の様引。い
まの野ハ藤袴ゝ。行秋をも
ぞ惜ま山陰乃。もゝ〳〵の道ハ

ゝ、きよ。落くる鹿乃様をかり
風のゆくへを。心をよ〳〵

同

上、河乃流きをく。酒をいろ〳〵で、
見まて移ふべきと。そゝ〳〵
らそ袂よもゝ〳〵留むきべ。
岩木よあらはきべ。心よわくも立
沒。面ち山路乃菊の酒何ゝ
苔かるべき

老松

上、松ゝねの。岩をつらふ苔む
乃。敷鳴ハ道とも実未あり
ハ。山乃。あ面ぎる雪のふるえ
をも。狂惜まる花威。手折や

まもると守梅の花垣いざやかこん
梅は花墻をこそ

同

守るべしや神の宴もはるぶ
名乃天満宮もくれなゐ乃花
も松そもろともよろづよ乃
ときやみ世よろづ代のもとうや

頼政

名ゐも仰ぎ月こそ出き給日山
数々はきよ歌みえてゆきちり
くる志ほ水舟もいれ花ばる
ろくとして是非をもろぬ氣
色ゐれ実やゐ名ゐ花ふ
ちらき宮治の里ゐ増る

同

仏の弦一流の場宴ゐ平ぶ犬
ゐれ功力ゐ頼政ゐ仏果をえんぞ
有がとき

升筒

遠ひちをもてらちを給ふ誓ひ
実もとえくく有明乃ゆくゑ
ハ西の山ゐれど詠ハ四方の秋
乃宴松の色乃ときやゆきぞ常
ハいにくとも定めれき世の夢心
仏乃音ゐちめくまゝ

同

ゐぐりへ在原寺乃弘ゐて松

崇老たる塚乃苔。是社それよ
おき姉乃。村ぎゝき乃穂よ出
るいいの名ぶおるらん草花
ゝて露濃ゝと古塚乃真
ゝるれいゝの。絵ちつ
き氣色うれゝ

三井寺

結ぶる水よ花よも。花咲なくゝ
れのづゝら。いまぶ若木れみどり
子よ。二度なぞ。逢ばらんゝ

同

類ひれそ。名を望月乃て胃ろ
てゝ名べを名ゝ人心。知そ志らぬ
も諸共よ。雪をいとふや兼てよ

月乃名頼す。月歌ゝおく

同

月ぞ山。風ゝ時雨よ鳥乃海。浪も
栗津乃森みえて。海ごゝの幽
よ向ふ影おきゝど月いまゝ
鏡山。やま田やゝ世乃渡ゝ舟乃
夜い通ふ人おゝく。月乃誘ゝ
れのづゝら。初もてゝれゝ出らん
舟人そこゝれいづらん

同

かゝて伴ひゝち歸ゝ。親子れ
契りつきゝぶも。富貴乃家と
なりまきり。実有難き孝り
れ。威德ゝめでたゝまきる威德

ぞめぐたかりをまる

天敵

よしちらべ。ゐひ出ぐと思ひまの
鄙乃現よ生れきて。驚ん。と思
ふ心こそ忘ぬよまへ思ひあき。
吸仔故の深ゐの命乃ら社。慇
みなまく

同

たとひ罪よへ者づもとも。又きつ
みみも沉まぐ。うきあのら我ま
はかくこよ帝を我こ来らせんく

白楽天

月の入雲も深ふや異岸ゐ。た
ぐひよかまあ者ぐき。海へろ孔
た加唐土の。紅路乃椿も春かが
らで。我海りと関かうよ月そ
程おきゐ波ら孔

同

今やくと松浦ゐ沖よまみえ
てかくれあさ。唐土紅のからくを
。楽天とみるすへ仔らそらめなる
べき。もつらやことちやぐ。唐人お
きべは言葉をそとても吸ものもらべ
社。意よ。お釣棹の服をや。釣
たまん

同

実有孤や神ときこ。実有がの
や。神と君代のうごらぬ。海ぞ

ぴさ、き

實盛

獨りあぶ。佛乃ぼだを尋ねゞ
ばの、歸る法乃場。知も去らぬ
そ心引誓乃組よもゞべきや知
人も。去らぬ去てをも渡さべや。彼
國へゆく法の舟浮ぶも安き。道
とうや

同

青ゝらぬよるの錦乃ひゝれよ
前黄白ひ乃鎧きて。人生作のた
ち刀。乃ゝ乃ゝくゝれとても
作ら寶乃池の蓮の。墓社なら
成べきも。實や疑ぬ。法乃教
へき杖もきぬ。金の言葉杖ほく
きべ。おどろへ至らばるべきゝ

楊貴妃

梨花一枝。雨をはびたるよりほ
ひの。なよいえきれ。美蓉のくれな
ゐ未央の柳乃みどりも臭よい
いろで增るべき。笑や六宮乃粉
黛の顏色乃おさも。おとさり
や

五菖

暮てゆく秋の嶽ら村時雨。古
野べのまひくも。人やみる張
乃程そ狂宮永の撮をたえ
つあでかれしき。類ひらあ

同

上ちうお氣色そかくゝ汐けらわ
の詠め迄哀類ひあや面白や
音信えゝ星つゝき奥おくき
谷れとよ。つらぬる汐ちを絶ゝの霧
まよ波ちを多ゝらぬ

離

上旬、雪とゝ乃ゝ。つゝりぞ三ぬる年月に
乃ゝ。爽をむゝへ秋をゝへ。時ゝ
松の風色そ秋夕のうへと波て
寄る。堀別衣袖さむ浦わの秋
乃ゝ汐ゝ

同

上旬、哀やいよゝそ月よいちゝ乃堀

竈の浦と乃秋もあゝぞみて。松
風も立ちゝや。霧の籬の鳴かゝ
れ。いだ秋を立渡り。昔乃跡を
陸奥乃ちゝの浦ゝ。詠めんや
ちかゝうゝわをあゝめん

同

上旬、哀や詠むさべ。月乃ゝみてゝる堀
かまの。浦淋敷そ言もつゝる波
の世迄そ寄ゝて。老の涙
そゝくゝるや。荒昔恋ゝや

養老

上旬、長生乃家ゝこそ。老きぬ門きあ
るあるゝ。是そ年ゝる山ぞゝ乃
ゝ。世乃ためゝを。松陰の岩井の

水も薬かく老をのべたるこころ
こそ。尚行末をも。ひさしきれ
く

同

上音 老をだま難ではして國乃人の
身は筆とあらば行とも古壽命も
盡まじき泉ぞめでたかりきる哉
やまひ水のみよすめる法やぞとて流
乃末乃秋もまぐ豊まもめる姿〜さ
よく

同

上音 甕頭の竹葉へ。陰やみどりを
重ぬらん。其外籬乃菊花は林葉
の秋を。汲ありや。晋衰七賢が楽

こ。劉伯倫が酒びし。汲水よ諸まりを
めやくめて薬を。君のためよ携ぎん

同

上也 雛ひびて父母の父母たる雨露の。
翁も養られく。汲水よあれ家乃猶
ひさく結ぶ手に。陰さへ見ゆる山の井
に。宮も華と思ふより。菊の姿若水
とみる社嬉しかりきれ

同

上音 ひれをあく袂べふりや。あく。天より
花りかやきく。瀧乃響をも聲まるく
音樂園え花ふりぬ。見え吹くすも。思袍
れぞく

清經

上ノ句
浅茅が人目をつゝむ秋宿乃。垣ねの
薄吹風乃。色をもたくぎ悲びをよ
あくのゝ風。ゝ身あれ。ゝ人ゝ。ゝ
悼ゝ乃。ゝ月ゝ。ゝ
さんゝ親おもゝ。ゝ

同

手ノ句
ねの。ゝ
よ。ゝ

同

上ノ句
ゝ。ゝ
くゝ。ゝ

乗女

上ノ句
そゝ。ゝ
ゝ。ゝ
ゝ。ゝ
ゝ。ゝ

同

上ノ句
陰頼。ゝ
ゝ。ゝ
あゝ。ゝ

通小町

上ノ句
ゝ。ゝ
ゝ。ゝ
ゝ。ゝ

同

上句 行くも其分に迷ふ雲の峰かな

ひろれば道なしどかに仏道なら

共よ戒をうき屋へ

竹生嶋

上句 名所多き松の浦山うきて

欲をば志賀の都花落昔なら

らの山撫子野の入江乃ゆふ

ぶ

同

上句 緑樹陰ちづむ夏木のかげ

色あり月海ようとしてうち

ざそ浪をもて松の面白乃嶋のを

しきや

朝長

上句 色ふかやはる乃月ゆきて光り

やはらぐ夏れすの眠りをさまし鐘

鼓時そうつるやはる乃鐘音を

見渡るおかから乃法の拝感涙

そうかぶりの乳色

姨棄

上句 今とてもなくちめらねつはら

おやぶとなて山乃夕暮よ松も

ちらそ雪乃ぶくりも物

てなの乃そやそつくそへ山乃

霧もちわり凡くく雲つき

てちひしき山の乳ふれ

柏湾

上句 ちらき時ぶ恨こあぐらもちりとてへ

我がのゆくえ安穏に守らせ給へ神仏
と祈る心ぞ深かりける

同

桐の花咲く丹の上の山を東にみて
西向く善光寺堂の乃浦風
わが袖乱す掃部寄てあり妻をみ
ちびきませ

同

みちの道一筋よ爰を去ぬ
らぬ昔ぞ西方極楽の上ぞ上は乃
門陣よいざやまいらん花月遍照十方
乃撞ぞ聞くさ迄寺の常乃燈陰頼
母。炎今絶を人ぞ夜会紅いぢやや
さ

上同

物乃あはれ可よ哀さく替りきて。
難波の芦乃浦風を爰よいせ
の濱蔭の名をとゝくや絵へ
ほやく煙を今に絶よきり月うん
とそてよあまの わざのみとゆるちきや
面ごろを敷嶋よりくもく人お
こよいぐくもるなき

打潽

同

いざとぶらんわこ君滋賀中も
一条乃ぬあまの花のひそと知く。
昔の夜れ恋ならべ絶て ひとり寝。
くらかりけり

志賀

春の色ながめびくにそこの朔ぼらき。
のどかなる風の音羽山きさ鶯なれば
見そてのなるよ志賀れ山ごえ
や。湖はなとさ。謡あり〳〵

同

入つる月も自浪岩。谷の門をと。雨
とのこゑかえて。松の風そ外。実や
あやまる。半日の客きるま
そ。今夕の上よ。志ら北方
〳〵

同

君そ安全よ。萬民時を楽らて。
国満乃雲の志るし海八鳥の外迄
も。浪の志萬巌の響乃ごきろ

ま切り

鵜

上ゆ
ちできるうろう浦舟。魂う夢
かあきて社。みるめ。からぬ夢のや
よ。ゆ。夜行く海志べ心の慣とを
ひ。へ。ゆ。鵜や。樵人。世を過きた
る志ゆ。ゆ。我いるのみ。すてゆ。法
れ力を。頼ゆ。〳〵

小原御幸

上ゆ
志づ。妻木。竹のもと。樵の嵐。猿
れ。こゑ。わらの。ゆ。ならで。ゆ。木れ。
づ。青づ。ゆ。人。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
法。て。雨。ゆ。ゆ。扉。ゆ。

[illegible]

同

青柳かくれのもとう柳ゝの花よりもめづらかなるやうかやうなる方をえらと。数奥よりきゝくもかくてをれしや浦[illegible]
寺宋はとぼうの志ゞ程も有べきにあらぬ吹べしや。

梅枝

西北よりそとこりて。東南よりあるる雨あり。やゝもすれば晴て月よかるべし。やがて有べ[illegible]
そして[illegible]吉の。松吹風
そ心して[illegible]人の夢を[illegible]
[illegible]

[illegible]寺

[illegible]色頼母。心も誰もそと志のゝ
ちよはすゝ蓮華の。濁りよまもぬ心
そして[illegible]疑ひあるべきやう難や
汝をそへそらさぬ[illegible]まろのたり。
ゝをそふやと人の[illegible]をいざや[illegible]
も[illegible]

同

昌[illegible]佛も我もおりきて。あ[illegible]
あるゞ[illegible]の志ゞり。至[illegible]心深心[illegible]高
[illegible]の鏡[illegible]志再まうみくゞ程
や。[illegible]ある数十様一志数わる
で。[illegible]も[illegible]給ふ
ゞゞ程[illegible]

同

十四、[illegible]やく、萬諸[illegible]教皆是[illegible]あらず
[illegible]べ、此寺をもと人も叫び
所[illegible]寺ぞ、佛と上人を一体よ
[illegible]あり

蟻通

夢よ行くうつつよ出る板橋
[illegible]月の[illegible]月[illegible]都の[illegible]
歌[illegible]やる方も雲井
[illegible]陰より[illegible]
[illegible]里ちらぎ[illegible]

忠則

[illegible]の[illegible]風のをとぎ
[illegible]
[illegible]

よ[illegible]あ[illegible]のさ[illegible]
鐘とを[illegible]
[illegible]

同

[illegible]花よりさい[illegible]のあらし[illegible]山風
の音をとろいとひ[illegible]よ[illegible]
木の[illegible]
[illegible]

同

[illegible]月をやくかぎろふ乃をのぐ
もよぶ[illegible]鳥の[illegible]
[illegible]乃よる[illegible]花よ[illegible]て浦風
[illegible]
音[illegible]

ゆく

熊野

ろりそ此寺と申ハ在原乃業平の。其方ハ郷よ隠ありさを長岡よ住給ふ老母乃よめる哥あり。扨こそ業平もさらぬ別乃なくもがな千世もといのる子乃為と讀し哉哀なりきく

同

四條五條の橋の上老若男女貴賤都鄙いろめく花衣袖をつらねて行末の雲かとみえて八重一重咲九重の花盛名に負ふ春の景色ゆく

遊行柳

今ハはるかところらら。人跡絶て荒らつる葎蓬生かるかやもみだれあひたる淺茅生や袖に朽にし秋の霜露分衣きてみれば昔を殘す古塚に朽木の柳枝さびて陰踏道ハ末もなく風のみ渡る氣色哉ゆく

同

思ひ出は殊のほかよ法をなして称名の聲うちそふる初夜の鐘月も曇らぬよそひから露をやかく滅ゆく

同

ミ庵の數を見ようきく此界

一人念佛の西方便り一蓮生僧
使は常に退轉なく念佛つて爰よ
りひたすらとまよ至誠すぐ姥
き

藤戸

心をとそかゝ思ふ山ふかひ
世の人乃拔ひ草も志げきあを
仇と陽の霞

玉井

あださの命をはく志る心の底
もくそり志さ月れ樓の光り
そふ枝をつらねてそろせよ雁
多志るる玉井のふるき堅り
のそやく

同

たゞひまなくしたゝ志ゝて
おのら涙非のやびやらるるよりや物
と志てゆゝでのかゝるあびく
大ぬ志れひくてあまるゝ

景清

迷世を背くとなるべ墨よろそ
もべきそでのあさまやゆつき果
なる身模を我だよりとやゝ身を
離ところありて懺このうさを
なるも志ゝく

同

志をばゆゝど面かげをゝぬ盲目ゝ
かゝ志きおのらでゝ心祇なるく

親のぎつあれ

同

上、備まる浦きあら磯よよする良も
きこゆる物塩もけをや焼ざもぐ
よるれも平家ありぬ語りいでえ
くけあくけをやこ

杜若

上、杜鳥あと海へだくそ杜多澤
べの水乃清らび契人そ橋
のくもでよわぐ思ふ人そも撥
べよ首を語るきあくれやぐ
ぬ袋ぬられく

二人静

上、水やめそ人ふそそ

こかるさ洗聖べ乃宮乃下あるる
葉をべ入いくら有てつまま
立といよ計みやこよりの山そ宮
て白雲乃流し沼ろ道とあれ
く

安達原

上、けらで留まり沼へ出て龍をひら
き立ると草もまぐれやも
しろうたくやてよひまれす
ぎいても宿をかり衣かく独乃
家ふるぎ夜のきの名さ振
ぬ麻ぐそのうき

加茂

上、清手洗のぎもぐしき夏

はかなしや紀乃森の梢より。秋風
音すりゆく子規をまちては行
やらで一声通り村雨乃雲もか
けろふゆふづくひ。夏なき水の流
隈くまでせきげへとかなしく

同

年の矢乃早くぞみゆる光陰
折りてもならぬぞそとの水
流きなるもつきじ絶えぬぞ手
向成ける

俊寛

夏こそも同じ宮居と云熊野
の浦わを尋ねゆふひとくある麻
衣乃まとへるをだにそのまゝれ

白良ゆく真砂をとりて散米に志
らゆふがれのみぎりして神に歩
みをはこぶなりく

松風

歎きつゝ我姿恥ぢ車をひく
塩の汲まるゝたまり水に迄まて
いまつべき野守の草れ露ならぬ月影
きえもうすべき身は思へうべくまよりも
かく海士のもてあそぶつらは撫り
涙沢く

同

夜寒まさる乃露もみだれも乱きつゝ心
狂気よあれ衣の袂日ざらひやゆを
しではその袖のきさきも波れよ氣に浮

ぷるのみなり

西行撰

百ゑ鳥ぱちくづる妻き物ごとよ
あらたまりゆく日数へくぱも猛
ぱておれやあよどまりてせなの友
ぱるもしらぬもそろたよたまも花
ぱ飛ぶれたく

同

捨人きぬ花よハ仔と隠家の可
きけぐれ枯くあれぱ春よやハ
わくよ迄もうきぱ世乃ちぐよ
あるぬを。ぐや捨てだよ。此世の
ほうあさ物をいづくう冊のぱみち
流く

同

遊をろあさ木も。花ぐのわりハわ
きれめ草木国土皆成佛七念の法ハ
ぐ

浮舟

月はもうきよ行末の祈よ祈を
の叶ひあべ頼をかきてみめ縄
ぐくや世をもぱのうまく

異服

あまとまもぱ。織唐きぬれ名あを
ぱ敷鴛の道かきて。言乃城草の
花迄もあらぐぎぬ乃色ろて
花をぐくもちきぱ。袖をたく
なるぱ。ぐれく

同

呉羽とりあやしめ給ふ機人
の心く御目の行ゐきんぐきよ。名
みしれな都人の心ら唐人と我らを
はるんぎらまし。実かしこし
やよき君よ。仕ふる人々も有難や
く

八嶋

釣乃暇も波の上。霞わたり
て沖ゆくや。海士の小舟乃。ほのぼの
とみえて残る夕暮の。浦風までも長閑
春なれや心を誘ふらん
く

同

ねなぐはしくハ浦の名乃。むまかる
たづね来るよおどか雲井よ海
らばらん機人は古郷も。都と守
べおはりや。我らも本はとくやぞ
浅よむまびきり
く

同

武士乃八嶋よ入るや月弓の本
は矛あづらまるゝ夏よ弓箭の
道ハ迷はぬよ迷ひきるぞや生
死乃海山を離れまやらで帰る八嶋は
恨めしやとよかくよ執心は残り乃
海の深きよよ夢物語ぞ申すなり
く

鸚鵡小町

東よ向へハ有難や。忍やまの観世音

きのれなる橋の狂人のふまきあき命
のかくれため、なるべし

同

和尊のみちあらハ神もゆるし
たまはせ貴からんて高位よ
まつるとしるべ和歌乃徳と
やうに

葛城

ようや芳野の山づらかまて通
へや岩橋のたゝ海れ風は是お
れや神玉敷ゆゑめて大和舞い
ぢやられでん

當麻

ときあれば法は是ぞ一声のみだ

世をとへと頼まびは来乃法萬年く
みる迄よ法経の法はもあらぐたまく
法はすよほまびはみ乃の世をまつのとれ
ぬきびはく言迄法の墳よまぐ数
あり法乃墳よまぐもあり

同

色ろく掛し蓮れて撰花の錦
乃そぬきよ雲の左後よ晴曇る空
も緑も法そ吹まの誘ひや悪
数の風あらん

海士

三笠山でぢうえん法きれ
南の海よりがんとゆけば極
あく津れ國のそや日乃本のハ

[illegible]めあるゝ法華のわりちをほちろく
あるこの世よ尋するハと屠り定めぬ
あ海ちをぶ[illegible]く

同

八り法華の徳那よて、天龍八部
人ゝ與非人ゝ皆寶見彼龍女成仏拙
う讃州志度寺とかう[illegible]。無年
八篠紹言乃勅幻佛法鎮昌乃
昊地と成そ、こ乃孝養とう
[illegible]

鞍馬天狗

花ちらゝ嵐といひ山里の使
[illegible]り馬よ鞍。くらゝ海のやまれう
づ撥。手わ枝折を考べまて奥も
[illegible]
迷ひ嶮つゝく不陰よあこあていざ
くゝ花をなづめん

同

花よ三[illegible]乃約有ゝ人よ[illegible]
初くゝ[illegible]ゝ[illegible]
あら[illegible]
[illegible]

同

松嵐花の沼とひて。雷と際雨
やある。花猿雲よちきんでゝ勝[illegible]
つとゝやゝ心すゝ[illegible]
けあゝ。鐘[illegible]
[illegible]の山道の花ゝ[illegible]
[illegible]

宮家

庭も籠そろれとなく歩きのを
増る苔はれ露の宿りもかきく
よあをできのなりきり

藏陽宮

のぼきびむりまざりの金銀
ををかるてかやきりの月れ影
をみる義天をわる心ちしておく
肝をきびとやれ乃肝ををす
とうや

東岸居士

南枝は梅の紀聞は法のをぢよ
わらん為の橋あれば人つ彼
岸はてりぬへや

同

救すと徐盗邪婬かはいく作る罪也
妄語綺語悪口両舌ものもてつくる罪
あり貪欲瞋恚愚癡心はおいく絶
きびはたれ私のをあれ棹みお級岸はよる
らん

龍田

殊更は洗度きぬさえあへぬなり
あるよ心してみき尾ぬ我をぬ
さ乃神ざろ打さび心もすをわる
る龍田尾ほのうまく浮音も
ぬけうえ度する夕書

夜討曽我

かるるまど紀宣へ鬼王団三郎

ぬらば笹をたをらんと云聲の下まで
もぬらす乃濕をきあへぬ

夕嶺

雲間ゆかすてゝ乃うき雲をゝ
ぬらす風の風のまゝ眞ぬけ月の時
よとゞもあるゝきゝをよ。あぐく寺
る

隅田川

人間うきひの花ざかり夢乃
風音うひ生死長夜の月乃影
雲乃。雲れ保へり雲間のまへ
ぬ。ぬ世界

雲林院

雲枝をとし雲の雲のたゝ手折い

ぬ人のなめ。そこゝも懺乃。つ
ぬ。のあらうひ柳樹をこ記まぎそ
都ぢ雲の錦おり

春日龍神

神社の橋そきぢおよとこゝろの
神の代すり代未うきゝ。まある
水屋のこゝひ迄塵よまぢる神
心。笠代森の松風。枝をあらき
奴乳

松橋

有芦間じ名の。佐野乃渡り代夕
雲よ。袖うち松ひく波通りあるか藻
魚の。ゝろも雲也了風の花吹渡
を舟橋ゝ法よゆ。く代道作ゝ信へ山

伏拝まゝ四方の路ゝを濁りを通らでへいぢくへ行き給ふべき

同

里人

ふりすて跡をあらためくゝ三寶かゝの行ひよ五道の罪も消ぬべし法はかゞ有難さ

源氏供養

上臈

世を思へども思へども世の夢ようつゝ浮雲のあるも一時のあぐふも消いまゝへの光源氏はかゞ。同ようつきても其まゝと頼ゝまゝれ

同

上臈

ねもきであらぬ浮雲の月そ心を

よ石山寺の鐘は寺に響ともさそふ風の前消ぬるまゝ燈の光源氏の跡とわん〳〵

花筐

上臈

君をまつ身を狂だよ有し山里よ。さ〳〵ぬ物てゝ月のつきあきまもまぎまふく松の尾そいろゝ。ようそ乃跡とてゝうゝき滝花筐ゝ章をゝぶきて里よゝ。きり〳〵

同

上臈

萬代のめゝ久しゝ人生乃。徒もさかく秋を露も老ぐれも時めゝて四方よそゝ

松もちと労れみどりまて。ときは
の松よめぐりあふ御幸車
やめん〳〵

同

上句 さゝあまりよ。まゝ丈人乃もと見
あれ。甘泉殿を立ちらび。ぞ〳〵き
床をうちらひ。ふるきまゝ古き
松もとり。ちとかゝ

同

上句 ちうられゆくやたゝ海ほの都
ぢうらまゆくやたゝ海ほのうら
てよつきぬちぎりぞ。ありがた
たさ

冨士太鼓

上句 ちうもゝ富ふ。いあど。煙どい成
ぬらんゆうち歌くよ。ちうひもおゝの弘よ
ゆるちうぼをみるからよいてぐ。ちもと源
なをもあべて

同

上句 無てよりかく有べきと思ひあべ
ぢうてうぐ手を出。ぢんちうが源
みてもとむべきわを人更よ。あ
ちをうら見かてち歌くぐ。れある歌
くぐ。表成る

皇帝

上句 翠翹金蓋とりぐくよかげ乃花
もうろつやきんぺ乃鉾紅乃せよ
類ひあの姿ぷゝやき。両ぢ風よ

よるかいだうのねぶれる花のごとくなり

同

上同、ことぶきあれやこの入江より天おがく地久きをつくる時もあるまじ

通盛

上同、磯山よりまぢかく岩根ふまつ程みゆ
たゞ波ばかりいさら波ゆ楫音計聞
渡の浦まで風さへ清うあり

同

上同、龍女成佛と聞時は。祖母も頼
そうや祖父いつまでぞ。顔見もそ
つゝ車の芦ぶいに清くあらん秘
と侍遊ばせ

松垣

上同、そこにあり古つゝ音をそこ古の
きうきの苔の。水きそこひくまゐ
らもそつゝをうくて苔ひ給へ

桜川

上同、獨ぎやの苔の。ふかく。月一音
てうき時そこ。ふれこそ慰
よ。たりとそい秋軽。おそこ花
ゆや姫の。ばかりあるあと桜ぶとあ
くこひ給へ

同

上同、花島の。立ちまつ親とこ乃行
も。ちらであ後ざれ。ひあのあぶぢ

よもとろへだて。縁あるも親とよのあも
忘れをぎめ。あらん。そや。ちぐ
祇園ごそり。ちくみるびたてい。まべあ
あを秋よ。花ちるど。流ぬ〳〵

同

常よるも。夏べよ。あきべ。ぎくらり
波れ花こそ。まれく。よすらめと。流
たきべ。花の。雪も。貫之。ふるこの名
のこあるよの。掬ぐぎの。白浪ちぐ〳〵
きべ。震ら。流れ。ぎぐ。ろ。の。鳴れう
ろ〳〵。水乃。花。ぎよ。面白ま。汀瀬
波〳〵

山姥

松風。ぎよ。吹。笛乃。ぴ〳〵。ぎ。沈。わ。る。谷
川よ。ぎ。まづ。ちく。きる。曲。水。の。月。よ。ぎ。そ
も。ぎ。ぬ〳〵

同

鬼一口の。雨乃。雷よ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
とと。ぎ。人。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
べき。深。世。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。

氷室

かくらぬやびむろ乃山は深みどり
ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
のま〳〵。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
霜。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
る。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。

同

詞ほとりやあらもあらしたましいそ
ぎやいそげ。水のおとぞあふるる
所も豪家の郡捧ぐる供御も
月乃本は君よ。御謡そのころめ
でたきき

善界

名にしおふ豊葦原の國津神
青うなばらはるかにしいろもあ
海地をほこ乃露おきや秋津
鳴根乃朝開されたるしまる
浮み目の。非れ御國を。見つるよ
く

芭蕉

夕ざれ乃空もほのぐらくやうやく

月よなきまゆく山陰に声やくま
くとあまた業乃声はひとつ經を讀誦
まるし

同

詞されば柳はみどり花はくれなゐと
知る事もたゞまことの香の草
木も成佛の國土ぞ成佛の
國土なるべし

百萬

女みな頼む人をあはれむ月おほ
れや雲をいでばや西へゆく「は
うかいやなれますとも誰かは頼まば
るれうたの憑むべきま

同

絵くその外業ずまるまで。彼浦本まるのもとよりそ。前生れもあの父あきべ。母そろはよ四ありあふ法のちらうぞ勇き。袖ぐひそこの車路をそらやるうえ。ゆ

紅葉慶

上京月、浪風もおりを留めをふかと。涙をあぐゆふでの。外無て替らと。契りしるもを定めあや。

ちやあきより。まちりて惜き命ぶ。君て二度逢んとぞ思ふ行ちを

右迫

上京月、ひれりをの。左をの馬場れて乃まよりかをもも白ふや。白寺の。ぬれそ。そりもあ面みて面神れば寺の弘ふりて。れも水高き梅ぐそのたちそそみて。これる弁のちつ花車四る日芸ぐそや北はつぐちん。

同

上月、ふそや花のもとよ。ゆう芸のを忘るふ。義景よりく花心。弘初て泳めんいぐ別て泳めん

女郎花

上京月、ちの面めたく面め郎花。ろあちくや思ふ流。女郎といきる花の名よ誰僧老を契りを寺。彼耶郭乃

かりまくら夢も五十のよのなかめ
しも誠なるかなしやく

同

鳩の巣むすび来てみれば三千世界も
よそならず千里も同じ月の秋の
あきの玉垣みどりの錦かけまく
もかたじけなきと神の宮

関寺小町

道をねらひの糸はへて織
や錦の色もうすき花をもろく
ろく秋草の露にぬれてとくきあらそて
松風迄も折柄の手向かなかなしく夕へ
これく

自然居士

うの代衣限めしき。深海の中をとと
くせく。孝先挑諸芸に同じ
臺に生まんと説あきらふ。自
然居士墨染の袖をぬらきべうの
乃聴衆もちとの袖を濡すぬ人
かなし

大会

鷲の御山をうつされる。
一仏乗の願に広大の恵日まで加
あり。鳥三宝を念じ風楽
と音信る。空あまくひちまふ深山かう
なく

三輪

秋きむき窓のうちに。軒の松風

うち時雨木の葉かき敷く庭の面。門は葎や閉ぢつらん下樋の水音も苔に聞えて静かなる此山住ぞさびしき

同

女姿を三輪の神。ちはや掛帯引かへて。唯祝子が着すなる。烏帽子狩衣裳裾のうへに掛。御影あらたにみえ給ふかたじけなの御事や

同

思へば伊勢と三輪の神。一体分身の御事今更何と岩倉や。その関の戸の夜もあけかく有難き夢のつげ覚むるや名残なるらん

安宅

あやかるあやかるしと弁慶はいさめられて此山陰の一宿りにさらりと円居して所も山路の菊の酒をのまうよ

東北

春もやゝ霞の関をきさ越て果はありけり武蔵野を分暮しつゝあと遠き山又山の雲を経て都の空も近づくや旅路のどけかりし

同

上句　月をまつ[illegible]の行縢乃梅はな花あ
るじをとれば久方の天ぎる雲乃おも
べく世よ　落えたる名ぶの色和泉
式部の花ごろも

蟬丸

上句　かくる浮世よあつさの乃ゑそ去らぬも
見みよやと逢坂乃関乃の成行果
ぞうれしき人伝馬はなずくどり
ぐりは松長袖を去りて林数の
みり捨ゞかまぶ

相撲

上句　老きぬ名を菊水
盃そうろうひかく如ゑあそう祝
き　此友ふ春ぞうきうち

同

上句　名ひよみ　桃の実の名ぶ
思べらぶ　盡きぬ宿社
めでたきれ

白髭

上句　光ちそふひられ嵐吹よけ
漕ゆく舟乃弦ある　浦わも
きるぐと　ありてあきつかり
　此路の山　ぬ　乱

同

上句　ぐんぐきのぶ　よきり白髭の
祈の松ひ　そ　ゆりぶり
きりぶ方　や　我き心

もろこし舟釣の翁はおもしろも安
くたのしみ世も此所よ生れあふ身ハ有
難しや

同

扨も楽しさはそらゆかりとりどりの聲を行
のやさしく秘曲をつくし拍子を
そろへて遊人の舞楽ハ有難しや

田村

昔在霊山にてハ名ハ法華一乗今西
方にあるじ弥陀娑婆示現し給ひて我
らが為の観世音三世の利益同じく
ハかり所ちよちらみ乃揺ぎ給ひよいう
でもそゞろや田村の終の道よもく
らからじ頼もしや

佛原

佛の御法乃草木まで皆成仏の功力を
ば加ら経や折らの聲々をきる流すて
出て入る息も聲仏乃ちやろやあらぬ
山風ぞ松風ぞ拂ひ渡る此原の草
木ぞ所から無く

同

松風もむき此原の草ハ枯かね
乃床と成よ法もあるとおそくらら
彼跡をぞ有難き

善知鳥

所ハ陸奥乃おくはうみある松原
の下枝にまじる汐芦の末ひき
しほの浦里乃籬が嶋の苫屋か

[illegible]

小塩

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

耶鄭

[illegible]

同

[illegible]

どべれむの戸を出入なさせ光弥
かざるようほひへ城や名よ宮家
さの都を見城乃樂もかくやと思
年の気分

同

たとへば見へ長生殿の門よりはるかを富
うり不老門乃前よりは日月輝くと
云心をまねびまうり

同

つめばうるもかくあらんと心
そ晴やうとひ月ぞり有明
乃よるひとあさたれ雲。栄
花も栄耀さそ宮此うへやある
べき

敕撰名

おそ野の原よ立石の。苔よ杉
ふ跡までも執心を残きて
ぷ立うへる苔ぷ。物淋しき
あき風乃ぷくろう松桂乃枝よ
あさつま狐蘭菊ぷ花よかくれ
ぷ原の財まもわすごき秋のゆふ
ぐうか

野宮

野の宮ぷ森のこがらし秋ふまて
ぷよ寄乃消へ。思へいふく
を行と思ふの夢寝ぷまてそあ
らぬ俤乃世よゆさのくへるてそ恨
ぷあれ

錦木

上毛　ゆくや流れきくのいそせの中乃水
とまく芳野の山をいづくゝ
や変いまゝ心乃わくゝ陸奥ぬきふ
岩郡のあゝ杉ゝ細布の色こそ
錦木のゝ度百度いづらよくや
しき頼成まるゝくやしき頼
成まる

唐紅

上毛　あさをゝ紅よ紅ゝ
くゝゝ子ゆへよ物やれるふらんいちん
やゝ倫よをひてもや秋ゝ
濃ありゝ

同

月　玄霄一刻ゝ乃價ゝ金も何
あらびゝ乃寶よもあらゝ諸
難い心ゝえびゝ乃国とゝ
よゝ行のゝきゝ有けるよと
日本人そ隨喜せゝたゝと
や箱崎の神も御愛しゝふゝ

ゆこやゝ

上毛　松高き枝そたらちる感乃嶺
らぬ沸代ゝ久ゝ見ゝれゝつら
乃男山きゝてそちやきゝ新よ
くゝ君萬歳といのゝあゝ神よ
こゝそこ感ゝ

同

上毛　栗乃引とゝや遠のやゝ山

ちくぶ島をゆくとて　君い船
ぶなる水にのぐくを踏りあくれ
び草木ぬぐくを多もあらる
あれ神神ぞあでたき神
ぬぐ見せ度かけれ

鈴木

雲見も板の宿仮初あら俤
遇ぬ縁一樹の陰乃やどりを忘
あらぬ契りなりそれ雨露木陰
見いなをの水ふりてぬれ袖あら
ぬ多ぬ枕をなる法やもぬぶらん

同

まつ人本来ときたまて薪とあるを

梅桜切くべて入りぞみうるり古を
くれあ有ありよくよりてつのり
給へや

羽衣

凡もる雲のうき波たつと見て釣
きぐ人や海るらん浮て来ぐ蓑
ならべ吹そのごけま軒風の松常盤
岩拝ぞう波公るあき朝なぞよ釣
人れ舟さ小舟や

同

辺陵頻伽乃初こ一声人うきらる
ぶ山うあ。鳥人手九海り紅あまぢを
きけべお川ぐ一や千鳥踏のをきつ浪
ゆくら海るかぶ風乃をよ吹まぐ

つらや

竜虎

見る友よ。ひかりを沿やまん鏡ぞうつる
月日は経をあく。月日は経をあく白頭
雲雷とのこ[illegible]りくて老ぞ分れ春の
えりみあるれども。俗、まわざ
を去ぞえろ。ゆる山路ぞ。
ちよ

同

星乃玉ゑと約雲見ぐ。そて
しれならば人心。たてろきよ脳
の月。金可れえりを書くえ。
仔ようを母まあるりぞんを表
るぞうれちよ

戸幻

むつりや。難波の浦のよりの
賜。さの延出えぞ。ちら及。
るちあれで。仮乃命。
ぞうを。
とりそとべて。市よ。
の。れよ。のてて。
ろくあれは

敦盛

須磨浦。ほ。れとそ。
おぼく。我。友。
ぬりよ。れ。億人乃。
だ。ぞうく。
里。ふ。ぞうさ。
ちあ。

同

上毛

[illegible]わぶるのやどをる心よりゆくのゝ
枝蟬のなきさびゝよ笛のねにたぐひ
草[illegible]乃[illegible]笛ならべ見そなへ書堂
笛に異なる住吉の行ゐらべあま笛ゐや
あるべき[illegible]塩木に海士の焼
さとに遇ふを

木賊

上毛

可き信濃路なる。木賊ひろき橋
うまとなりぬ[illegible]
よりそなれ夜ごとに袖乃
露をあ。草迷宮を行変
消ぬのゝ[illegible]出るや牧笛の野人
ある面

同

上毛

[illegible]仏もも麻べき寺。[illegible]
[illegible]見べば木賊のこかれそ
ぞなれ[illegible]
やんぬ[illegible]木賊刈
[illegible]

蓼人

上毛

月をばあるあるとも。月はた見
そ[illegible]蟬乃梓のうれ[illegible]
ありうきをを独[illegible]

同

上毛

我人の[illegible]
[illegible]
[illegible]

輪蔵

ゆききまで月の花をもゑてまぜ、へだつる道すがら棄りいでつつ、胸の月日晴れ曇らずや、三界唯一心の外あらじ。諸法の家居に心も動かず、天満星のめぐるなる。輪蔵をひらきて、おのづから給へや

寝覚

立のぼる雲の麻衣袖もたより、瞬く浪居乃月もまれなる諸法の橋も、あらそひつゝ八重ある花の雲の解らく、落ちなき谷川のみぎは岩ほや流れては、滝なく

同

白妙もゆふぐれは猶もなく、あるや保生は空と見えば月も朧ろに出て山の端白き松の風枝をならす夜来はまた、恙なき御代を祝ひなれ

江野嶋

三千世界のうちにまで、中も皇福乃家々もさかへ、一切衆生のちからにあひ、でんでん位に至る緑の海山を、おさまりぬる代乃末らかきなびきまで、治まる国のつきせぬ御代は久しかるべき、やく

同

善神一切の福をさづけ、悪神を退けて、里の楽しみひをいはふ浦風も天部の

拙なるとかや。されば牧蘭なるを。美めのあそ曇らず

代主

そもそもとりそ。廣ふ海づつまる神亀
和光の新きいやまつる。栄へ幼也
ゆゑも豊み照ま日のかや。千里万
里をまおさまれる。拙なひ乃海者。あり
ぐこや〳〵

同

金剛堅も。名ハ葛城の賀茂ハ
神〳〵。代をまそり君ハ威
光。あまね行〳〵。四海の浪を
治りて。國富民を豊ある。新そ
遺り者〳〵

同

神ハ。昔ハ遠ハ。名ハ葛城の賀茂ハ
神〳〵。代をまそり君ハ威
光。あまね行〳〵。四海の浪を
治りて。國富民を豊ある。新そ
遺り者〳〵

九世戸

神乃代ハ。昔ハ遠ハ。名ハ葛城の賀茂ハ
神〳〵。代をまそり君ハ威
光。あまね行〳〵。四海の浪を
治りて。國富民を豊ある。新そ
遺り者〳〵

同

天の橋立ゑそらに、都若くゑ浦
べも、孫さび思ふまくて四方の秋め
ゑ面白や松風ゑ吉きげく。立く
る浪も白妙の月ゑこの夕べ乱
色ろ乱く

逆序

神おひの。ゑ山ろの岸やくづら
曽。ゑ山の田の岩水の色い濁
まとゑ面ごてゑ鹿ゑ海ゑ
る神ゑ。ゑくてゑうげも。ゑ
の。曽ゑとゑいの色いへく撫び
もたへぬ龍祭いてゑ神の。
向うな

西王母

小辰の共ゑ敷く。ゑ形天ゑ過
る星ごとく。百官ゑ相雲宮や
千戸万戸のゑをおびうゑこを
よゑ。ゑ四方ゑ追おもうかゑく
市ごれ人銀珠ゑゑをおく。ゑ
くやくゑて日夜の勝坊釣ゑ
ゑりかゑ見城ゑ乗ひ
ゑ。ゑ

同

ゑゑ。ゑ。ゑ心ゑ。ゑ
陸ゑ動ゑ。ゑ星ゑ。ゑ
うゑゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ
ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ

あれ。ゑくたきべ引そくも。いきみのるゆの。ゆ。ゆ。

同

上方、こちとせにあをてふ桃乃こと。
ようく。花さく裏にあふるも
ゆ。是者乃すの恵。あつき國土
のみぐれ種桃花乃名ぐたへ
ある

道明寺

上方、神ぢぐる。松い千かへり子代乃秋
霜を多ねて草ぢをゆの子和
ぐらおぐらへく神よ姫へそまつれ
宮詣くま嶽ぢふつさ誓ひち
消ぐやく

同

上方、月見水版乃隔おく。神佛一如
あれ寺しるのみちあこうかよ墨堂
奴神の宮おそたつとさ。有ぐく
有ぐ。宮神かも佛弘なれ和
光乃弟に寄く。綿ぢそたの望
きおく

経政

上方、こと。紙書ぢと云ひちと。亡者の
為よ手向つ。同ぐ糸作ぢこ忘も
仏ぢをかそく。聞く夜と乃法の門
出賜の道。あ。ゆ。

同

上方、宮やくれ作乃鏡出れ水かやくとそず

人あるべきとて宮のまへまぼろしよ集
まてりまつ紅よ集りたり

同

上月　ちかきべの経政ぺ　しまだ子年
乃昔よりかよへ仁義礼智信ハ五
常をもりたつ乃よ花ハ風月
言葉を飾とて歌秋を楽
乃ちよ露水乃あ世の心よ花ハ
ぬれそあり

般

上月　風深よ虚る忘執の甚いきて　ふ乃
海なれやす面れ門若いく世まぐ夢
のちまるよ新らん　ま乃行濤
宮ありても紅よ若くぐち

ふ海ふん

同

上月　名をとあ　あるべハ花のうげそ
ゑ乃末乃世かきく甘田門義乃
を捨てこそ名を久きれそ
の胸乃ぬうけ心ハ花そ　ひくゆ
ミ筆若名こそ　たゑおれやく

巴

上月　ちへ乃是こう君よ名ハ今も
ちの月ハよ仲乃佛と現ハ神と
世ハもりたつ弘誓願乃ぞ貴和乃世を
ま長へも一樹乃ちきぬ仁ちの縁とハ
志め　此ハぐはよ振居　ぬ乃ぐう
経を讀誦ぐ　ぬまるぬとなぐ

給ふ誓ぞ値遇らあゝありがたき値遇かな

同

罪も報ぞ因果なり みなそのまゝ
む法の功力に草木国土も成仏
あれば心あるも真道のよりて
似是何ぞ尽くしぞや人の身ら有
がなや

あらし山

都にも実もならぬ山桜
花の種にこれぞとて尋て今ぞ
みよしのゝ花は雲かと詠めける
歌人の名あらずとも全て見にてあき
べまぞその詠め嵐あるきき

かれく

同

流るゝ人もまちまちや九重なる内外よ
かなふ花車おもはぬも西よりめぐれば日
れ数ゆく雲井のやまの紅葉瀬
に落る紅葉もちりとまる花の
こ瀧路も久しき乱れなく

同

芳野乃山にはその花の種
う植て嵐山にちらたなる神あ
そびぞ目出度この神楽白ぞめ
でたき

正尊

いかにかはあらばいかに舟乃のぼり

べてなる事も侘たゝあらうまゝにと
そいてたらうなるともよりや露
乃分れまえてゝのこゝ孫さだやく

巻絹

待ふまきや手ばこ結びてゝ髪の神
うゝ乙女のめ縄の引きとうんや
けゝ手やかゝれべ心だらくえ代乃松の
ゝ情ゝ

鐘馗

草蜘露よ老去れ寒ぬるゝか
たちも老松淀よ風絶えとゝ
松る答へ花や何事を思ひた
えもん色を香も絵ゝはそ花
紅葉ゝをいとう定めゝをう

いとちぐあむ

項羽

草かるれ乃こ心ゝ花をう
とや野原よ産あれべ
けゝ花乃枝をもて
ば沼を秋言く枯野よすゝく
出の言も花を

同

天の川お渡り去く七夕
く年よ一度ゝ心きよ秋風
ば故乃をと濃うゝき海士小
船水言ゝよゝく船のこゝ
さゝをちゝ奴よやゝれき棹を

さくふよ

檜弁慶

神裏奇特ふ思儀成。仏生れ
初よりをのゝせ。かゝつぶ法ゑ
たまて屋。都元紙。とゆ敷たゝ。
ほどのそれ万屋じぎて寧特
あまを者ち

熊反

四方草木国土。そらちぢお
きべゝ紀く其至にと心あゝあく
ぬ。扱こゝろ名ゆりあきゝう風ぐいゝう
ゞ有べき

小野

やゝて出る風秋の光れ。月毛れ駒

よ心ゝて。雲弁よ翔き時のまも。急く
沖の沙海ゆく

同

有ちまるそ場城乃山。ば幸たえ
に跡なゝ。よ代のふる道ゝど
りまゆく海も君の惠ぞと。霧
き情乃色香をも。まてひと乃
ゞ花鳥の。音にゝよたゝくよ宗屋の
あゝゞ。ゆ。たまゝ。ゞ。調べ隠きゝ。も。ゞ

野守

仲麿。我日本を思ひや
る。あまれ急ゝりを乃ゝとおゝのえ
ゝまゝ。三笠乃山陰れ月ゝを。れ。明
ゞ。ゞ月あきゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

数日長閑き氣ながく

同

上青 立あがしべなるそ野そりれ水鏡
歌とらいてしとぞ思ひ老れ浪ま
水乃龍宮見てまつ乃もと見れ抜そ
京しさ乃げはやきてれて。甲斐つら
ぜとろきへの鳴ぞ乃鏡そ事そ
年つるき世乃。時乃のやく

張良

上青 男よこそろ邪見も為と。志きべ嶽
るそうらミあ。こそうきそ秋
らめといけらをあきく。かべり
きるく

同

靜 曉けてそるかよ。夜馬よ鞭う
つ人影の駒をそやもるる郭公あ
る

屈生門

上青 墨りあき君乃邪墨を入るそ
らづのどき紀春雨乃音そあ
る郭公乃。漢芸道も未きぐ
にやし歯乃浪そおとをぬ九重れ
るぞ。ひきうきく

同

青 夜あれてるふ法人よみをもめ
く盃ぞとりくあきやなのさ
ゆ。やたけ心気ひとりあるぞ。
そのくまづり。頼くあまく

酒宴

同

上句 [illegible]

鉄倫

上句 あ[illegible]の[illegible]と思ひぬ山[illegible]こねうだよ
人のあぎきいあ[illegible]あるにゃんや
年月思ひよ志づ[illegible]うらみけねつる
[illegible]心[illegible]鬼とあるもとうや

蓋深川

上句 [illegible]

同

上句 [illegible]

雲崔山

上句 [illegible]

同

上句 [illegible]

草葉よりきり紀なるべうりのもとくうらふよ
日頃無くて待日はきりぐ時鳥おぼえも
とゆくとく寄くあるべき橋やめさはく

住吉詣

上臈、見渡せば霧まぐふそあるこうり
ぼのえそもる村もみぢ。これやかか
る野ふ特影てまうん花のそれあ
ら。ゆくきえい渡邊や大江の
岸よりも浪も。ちるもち賛て住吉
の浦ぶは波を祝ぞあまる

同

上臈、日の本は神ちらひいをあべく
和老屋塵。緒繁乃はもぐ
八相撲道へ利物ふてあ紀返

国家民をあれも作心を張入のを
ぐちるべき

同

上臈、よ代が代の舞の袖。海めぐ呉。盃
乃。ぷりのうちるはきり舟の浦の
ぐ。嘯る住吉は。瀬よりあ乃
浜路。夜。長果あき。海めふ
れ

谷行

上臈、別まそ夜ぐ。は行まきはあきべよ
そふのこ。ぷらやなこあ。ぐうづら
さや。高は山乃雲の雲。晴ぬ親
乃男ぶれるあみ。ぷ。ひうれはき

半部

五條のうしとゆぐほせれそうら光
きまこうとあり。面影ぐろ早なる
ぬるくそのかよかるしまり

猩師曽我

使の法て帰りしへ花をそ
つまとかそれい旅路よ咲る
見まるかる紀冨士の根ん煙み
えまるかのまやよ咲りう稼た
まる沈れく

くるま僧

二累無安猶ゆまもそば出るう
乃車傷郎。めるえそぐれる道あ
りきまあのり得たりく

吉野天人

袖ふれて木の本よりいばや
旅めんや花のもとよ。咲らを
守を見るくい義景よりて花恋弥
く秘く旅めをいずくあまて
ちめん

大佛供養

景清き沉よるそ出屋毎よあるそ
てあるまで。類そのコトあ暗夜
ばまりあるきれどのとり楫の舟
よ乃を主後蘭ありしいかるう屋
やまきたりしタの麟も共ぬ
きぬ馬よれるからくも

同

上同

ちとせの森の両露のごとく落て
ぬらせ給ひ袖をしぼりうねたる涙
うかべ[illegible]ら親心わかぬ女子門
をたゝり景清も[illegible]をぬぎてあま
ごとをとて[illegible]

同

大伽藍[illegible]くやう[illegible]
くゝ[illegible]乃日の三笠乃山よ陰た
ゝ[illegible]乃[illegible]ぬ供養をお
[illegible]

忠信

忠信[illegible]供[illegible]
きべかまへて命を金[illegible]
供よまらぬ不忠成べ[illegible]

やゝ[illegible]
[illegible]独りとまる心の便も涙ら
ん〳〵

烏帽子打

かゝ[illegible]よ[illegible]
立て[illegible]
結[illegible]
[illegible]の上よ[illegible]
[illegible]晴[illegible]量や
[illegible]箭の大[illegible]
もつらん

同

[illegible]の[illegible]果[illegible]
[illegible]乃[illegible]

ぞ黄泉あまく

大親狸

琴詩酒とゆえなるぞてぬ友人
ぞいつそかとらぬ酒切手を酒
ぞ愛きて方人の心より引
くく。思へ聖ふそ盃。詩ぞくく
ふもけうづき。酒のこ名ともだか
り。他やてそ実市人の秋
を笑らむ

同

不思議や汝友ぞ。来らぬ晃来か
ぞよむ。ひく秋友のなど。酒り
ぞふそや高ぞあへ人

鶴亀

上書 金銀のうく。ぞつそて敷妙
ぞ錦や猩猩の扉車輦の。行ぞ鳴鶴
ぞ捨。ぞ行の鶴亀ぞ。峯芳山ぞよそ
ぞ。君ぞ。ぞ。ぞ。

[illegible]

大社

いなぶねの[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

東方朔

[illegible]

同

[illegible]

春栄

[illegible]

也そて歩よ扶と寄らへまるり

同

狂歌ひの盃は歌も出るや和歌を
伊豆の三嶋乃神風そ吹みるべき代の
初め幾久しさも限らしやう長令殿と
時ちと云ぞめ〳〵たさ

第六天

桜乃宮の花ざかりそもあの白雪立
まよひ空へ白ふ月よく出る。そもそも
来る彩も長閑ふ。知そ歩る愛も
道のべ行ふ袖の花乃香ふ愛
しの。氣ふなる

出蛸

上方、ぶを歩〳〵歩畳は。塩そ出

舎利

上方、有難ふ。今そ社のこもりてま
れあ〳〵りある佛舎利を。拝む事
乃あらたさを。ようたとなる量深
気袖をもぬらす。氣色

小鍛治

上方、云ぶらば改道。そぐ。おまへ今は
仕事。そもそも奇特ふ。前やきも
それ乃こ頼む。心

同

らぬ有様の時乃うるをそ。笑く
無程のころうれ。宮や。笑てんぎ
そ乃まて思ひ。ぶ。胸をうた
しむるこ強とるぞかあ。ま

上句
聽よ耳。然れそのいふ世中に隱
きいあらじ。ねよ。を。雲れ上人へ
乃御勅乃。さそりハ行くらうかゝ。
たゞめけ君。恵よ。ば御勅
もあどかこゝろ。ゝそぎあどゝ
繁へぎまへぎ

石橋

上句
入ゝるかゝを白ゝ乃。谷れ川を。兩
と乃こゝゝ。極ゝ。れ。ゝ。や。張つ
て半月。宮ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
きてゝ。

合浦

上句
江ゝ岩流を。ゝ。合浦の。ゝ乃
江の辺ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

聲も松風をそやゑるまく秋の夜乃
月清く庭に置く霜ふるまんあ酒
や

松山鏡

梅さくらん跡をもそひそられ
と面影にとゝまさきをけ乃母
乃恋ぞ有ける

金れ

きくやいたちゝ浦まつ
陰ゝ撥居て月も嘯くとゝの時
神の告をも待て寝ん

大江山

月乃都を立出て行をゝ西
山やゝ風をそ吹ん

ぎもたのそや鬼神まりと大君
ぬくゝもまくゝかゝあらゝたゞ紅ゆきや
ゆ鬼ゝ大江乃山ゝ着よりゝ

岩船

実ゝ乃ゝとそも神の代ゝ
きつきぬ君とて神と君
との仲恵ゝ深成けり

知章

会くゝ紅だゝ三悪乃罪ゝ
消ぬべゝまゝて妙そとく法の
道ほゝりのおゝ弘を逆縁もゝど
かゝるゝ

同

胡馬ゝ風を去ゝ北ゝ西ゝ

船乃ぬしを綱よりはなすまでもゆるがや
とまるべき心なり

後世忠則

浦四や忠則の波ぬ抓むぎんせ罪
をなきで義れ智信の乃道も左で
きくら。寄道よ尊ゑ者ゆ矢ま
ぬ沖あぎ行へ。ぬ二道乃忠則の
船をえく彼岸ぬ堂よりて左海
和や

同

ち波や出賀ぬ都きあれみを
ぬ。おくり乃山撫られとすれて
も乃ぬ世のはまれをのら諦寄
のお

憑重荷

下りれき憑ぬ菩提ぬて忍れ
ぬ行きいこそ。るや獨行き
ぬ松の肩へてぬて左えるき
ぬうそ憑ぬ行の重荷そ

憑

三年ぬ秋の長るら。うきはそ
まけめそきく思てい身よ疎
りむ。いかそり跡ぬあ。実やい
つそりれなぬ世なりきいろそも
ぬ。憑ことの塚うれらん。ぬの心やお
をろら抓きるきのそれ

同

ひらくる法乃花ところ菩提乃種と

物よきもの〳〵

鷺

鷺の舞ふ池の汀よ松かりて都ふ
そ似ぬ住居かな　なの行くらそ好ら
よ面白や。詩哥に舟浮べ笛
糸竹の。調あやなる曲水に
川ふきる盃を浮よ。景面白
池のやかた〳〵

月

今迄へ行末も考ぬふひ人乃
三世の契りに後と。頼む情
も是あまりや哀きえんあ
れまし〳〵

七騎落

紙松浦さよ姫。そろ〳〵ふ坊
主乃俗ぐ。おぎ内ふひ目
し有様も。今迄辛ぐれやと
れ。別まよ。哀らと。皆涙をそ
流しける

同

たとへ。仏家よ入しる乃事
ほどよ立かへり。世乃孫よあ
ふ。の。とへそい海よ。沈れ
たり〳〵

弱法師

入らも来世といひながら。さす
ぐ名におふ。寺に。仏法家初に
天王寺に石乃鳥井。爰あきや

笠寄て結まをいだす立りてを
ゞ海人

同

上月　雲や盲老れ秋おまで。みる心
地まる梅う枝の。色乃裏岩長
閑けさの勤波乃数よ。よそもれ
ゞ

続上

上月　田ゞ社うらの志ゞをべいだおり
をゝんゝうゝわゝう。とふ人あらば
ゝゝぶとてへて此恋の浦乃塩く
ゝん

同

上月　かの蝉なゝ多坂やゝゝやまてびをひさ
ゝ

陸奥今この君へ恋ゝの塩屋露もをよ
らゝ行の板間ゝひゝをゝゝゝゝゝゝ遊ぞ嬉
ゝかりゝる

漢路

上月　裏乃田ゝ人ゝはをて秋きたゝ。花
ゝ心乃あてゝかゝるゝゝゝゝゝゝ
苗代乃水ゝ心岩穢ゝまゝさてゝ。ち
きべ裏ゝや稀田乃雲ゝゝもゝ
ゝゝ。きゝゝ

同

上月　種をゝ紀種を紀あゝく苗代乃
水うゝゝゝ雲雨乃ゝあ紀ゝゝゝ
ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
里ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋よりあるなりべ稚を納めん神徳
慈有親乃整ひれもとぐ乃神のち
うひ屋な

同

上句 富士を世をよ万歳をうたふ
雲乃声 秋乃秋津洲治まば
ほそ久しかり

放下僧

上句 古郷乃名残もそれ有明の つきあ
さすらあるらるるぞ限り見ず
ハ我をや軒ぶ

同

上句 朝の嵐夕べの雨 きふ又明日昔そ
とぶられ露のむら時雨 定めあさ

世を吉川氏 水乃うるたわきいろ
をあ江や漁ほ

よ野野

上句 ほれそうひそ芳野山よ志れ き申
事ぞ時ぞえあば 判友の扶け
ろあそ打ろ や歌ふ

能太鼓

上句 い海乃女をうたく いそ花 籠者
了あ すべとかそ のつきあ人 情
あ とは思べ 数言に科をのろ花
え反 砌ひ乃 ぞ楽なるむ ひ乃
狂ぐ楽あ

同

上句 ぞ楽や秋妻乃 ぞ替りた野 籠

乃中にはなまぬや雨乃ふれぬ間ぬ久孫そ
ゆ　き　ま　西樓よ月落て花の間をそ
ひ　果ぬ契りそうすき燈れ　波をそ
　　　

ゆくとやく

身延

青山に今三千乃花薫じ我が身時為
現清浄ぞ乃れ木乃上よ心三観
若月みてり乃ぞ乃の数乃雲をしてち
に身延山乃阪水も讀誦すき深て
自然の霊地なりけり

同

ちてそ妙法れ場乃延乃やま
乃の勝れたること水のてをそをの乃ち
諸法実相とぞきつ草木國土皆
成仏の霊地なりけり

松蔭童

心なれぬつ返もたふとそ

うへふびくや草葉にかへそなく
てもやうに分つ行ばれもあく
尋ぬるふ不思議なりけり

雲

行末そ山伏のそり衣遥で
きぬる接をそ思ひのもへも
く日数夜かさある麻衣木曽
ぬる乃もそ谷深くぬけ路の末
を言かふ乃のハ重山ぬいくれ
なり

同

ぬくぬ四方よ深あ秋の日哀
弱ふ雲と志ぐきぬ乃べふ
面とそ乃ぬ乃もれそ乃草

木のつまもこ深そ時ゐとて。百へゐ
へよ落ちこま。指の秋い面白や

教生川

上毛　光源氏代よりてあそ月うれい櫻山や
宮路のあとい久堅乃ぬのつちくれを
うゑはゝ枝をあうゝ松乃風ゆ代
忘てゑ乃こいやまゝ鶯きまゝる社
弥く

須磨　源氏

上毛　ゆゑ袖をうゆゆゝく山乃新の
ゆゑさゝも思ひ橋をわそゝく彼古
墳そと切ゆ乃手向の梢わこゝ
こゝゆをとぶゝ乃ゝ

同

上毛　閑よりも忘ゝと海ゝう須ゝ乃う
風ゝ山そこゝう乃山里ゝ栄といゝ
ゝまで名をゝりゝれゝゝぶゝゝで
心ゆゝ須合ゝゝゝゝゝ給
月そゝゝ

胡蝶

上毛　梅ゝ香ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝへぬゝぎゝ我袖ゝゝゝゝゝ
そ年をぬゝ古衣乃ゝゝゝ
昔ゝゝゝゝ我名をゝゝゝゝ
石乃浦ゝゝゝゝゝゝゝゝ
やどをゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

松虫

新

塩風もゆるや岸野の秋の草

松を繰て鳴る浪の音

てをぐなちそ市びとは

よ松を行くゆく野辺の

さ濃自や

同

盃よむ人だにも狂まち草

世の秋をも限りや松出る音

仙生まれしるしも

ぬ友てそ買えるまで市のたらう

あき

同

古綿よ俳諧新波人戸

たく屋そ市風形もかちぬち

ぎりを思ふ苔はわとれえぬとも

ゆめ心の心や

一角仙人

露時雨もる山陰ふ下苔ふ

そ秋の風をもうしてこまちる

振衣雲間を志の雲紅葉

きもしらぬ山中てはぼつられく

踏まよ道の向はいろ深く

同

水は扉を推ひらまく立ちるその

姿緑の袋そあひのちる男扉の角

はつらはまも紅人をふ今見るるものぞふ

しだある

同

上同

ゆふべの月は盃をうくるかな
夕べ紅の。れる袖白菊露の
ちらるるもいとゆかしき
けふぞ始める

陸奥上野

三笑

花も早。霜降る月は曙よ。野山の
草葉色そいやちまた紅葉だらう
いろ〳〵。枯れてなれど。きら菊の
花はちぐらくれる月は。ほよ高
る氣遠く

同

上同

爲山の。きく橋を心ぢらふ
りたく。巖の腰をうき。曝布を流
絶へて。三千世界へ眼てたきく

二月

二月縁心は中にきのもなく

鳥越

上同

山でろ。ぢ。雨はれ。なるの。
うぎぐさよ毎の。て。我らを。
妻。へ。と。れ。

蕨

上同

多胡の浦。底ちへ白。波浪を
ぱ。て。の。人。為と。
花を心ちく。へ。
や。へ。涙。花。色。香。
人。て。と。

水辺月

上同

夏や秋行くみ空の通路へかたへ

涼き風ぞ袂に手洗ひ清めて
もゆるくまゝかの乃宮殿の
神あらべ頼を魚てうさ人よめ
り逢べきかの車乃かゝれの系よ
ゝ

寄占

神風や伊勢乃濱荻ふきをうへ
よ
とゝ
と云も同じ
なり
也と
敷のゆも同
きべ
梓弓伊勢や日向乃事
そ
日向
同

旨
宮や君ゝ
ゝ

も
別き親
あ

雨月

旨
秋
新月
る
秋
れで

太宰府

旨
天四海波をうち治へて國
動
道
歌
國
なる
枕詞

上青 親まうらもを後ぞ深さ契りの
中あまぎぶかこそ我君も袖と袖
しめ結ぶあさぢ生の浦さらぬ命をも
てし助ぶ狩りの妻さうをまお
ぶ。あどやうふしの浦言葉をそ
なりまぬ。和歌ぬ者は男昔
のなりけり。つらうらめ嵐う紀
浦やく

同

上青 ぬぶべあみとうく走りよ紀ぶ岩木
ちむそぬ義経あまぎばなうく
膝よ懐きとうぞや梅檀ぶ二葉より
仕自ぶあぎ。城ぶ次信ぶちりきと
とぶ涙ぬ乃ぶる同逃みれ涙をぞ流

しぶる

国栖

男廉ぶ上ちる英日山。三笠ぶ
まちる雲雨ぶ多いぶぐぞ吉野
下ぶ。や吉ぶく社花雲ぶ春
の夜乃月ぶ雲ぶようんうべ頼
ぶをぶよ。ぶ上ぶく

同

上青 岩ぶる水うぶあぎぶ。ぶ
ぶぶや瀧乃瀧ぶ。ぶ紀ぶ
弥や吉鳴ぶ。の浦ぶ魚のぶ
づうぶ。ぶうる洲占ぶ。ぶ乃ぶ
しく思ぶあぎよ

雷電

上ワキ
ふるぶるぶるそれそれ秋あき
や月は濃まさる名所のくやこの冨
ぜとみるこゝろ法の灯ぜをのべこうう
歌のうまを見恵こうくをそらさぬ
御ぞいまる礼〳〵

同

上
歌めづらやまれびとのまれにあふ
時ぞ中〳〵夢れ心ち〳〵ていひや
まこの塔まれ人も亟根そこ
こうとあく御せよ姫〳〵まこ
隙あれてなる夢のつゆせと思
を思めや〳〵

絵馬

上ワキ
風いうへある松わや雲崖わちくる

栗津野乃苔の志げきを分越て
瀬田の長橋わ渡り野路志のわら
ぬ草枕夢そ一夜袖寝られ〳〵

同

上
天津日つぎれ代〳〵ゆりて人皇東
代乃子孫迄あり恵をうけつぎ
て治まれ代乃我らまぐ乃ぬ
志をあまつ比宣仕へる〳〵

同

上
うちまく天あや見をそ頼
神垣乃絵馬や掛きりや国土安
あきてつよ

現在七面

上
尾上の風吹ち迄そ〳〵皆法の

あなうらびやの海路津浦のひびき
も聞て無常流浮の御声ふく鶯
の面影を金ぶあらびの巻七法の花の
ひそやかに咲る風ふく立波ふかの浦雲
も晴ぬきべんの月ぞ冴やかなる

同

来てそ人よ。ゆ延乃山のこ雪だ
ふ。奥をもとへて消ぬきべ。昊も恵
日の光りかゆく思へべ我つくりす
罪科元。かくこそ消めれもしや
と。信心ゆ涙ゆ実有難き御法

照君

仮昭君乃まひぶそ。緑の多よ白ひ
しも。奥やくく愛いと柳花思ひ見
ぶ。ゆ延乃山を付ぬ庭乃雪。人ゆ見そん
本陰乃磨をを見ひ

仲光

おいぐ為なきぎ。父ぐ内もまいひ
ことよ。ゆを付ぬ庭乃雪。人ゆ見そん
もなよぐ。ぐといふひもあろべ
しとて。俳力をとり給べ。老り生
る。仲光。中まそ。ゆ。ゆ。弱
つきまがり申つ。尼き美女ぶ前の
浮身の程ぞいたやき

同

報ひい人乃智ならじ。只自ぐ為ひと

こゝろをたゞうよや恨みある。浪世の中と思ふらん。なほ深ずを。清りうたきべ時うつる。ちや首それやなうこつと。言ひ葉も風もまくむこそ世しかりきれ

梅

上ものゝ。岩根葉れあぐそもしみ。風そ音せぞよる浪の。ゆくきかちそぐあ。くゝ。紅波乃浦れうらある。黄乃葉色を冷ぞ見ん〳〵

同

上ものゝ。うらやまれ。あき神代乃ひとへと。てまうきで。淡出る。ゆれ道。直あれべこ技。鬼神をもあぐ。もく

あきいぐでちるうくべる。お寺のあるべき

同

上ものゝ。黄乃夜の月待ゞて乃枕元。ひのべまく衣手よ。うつる其香ゑ。むくれあきやくるも。恋るき。木陰うれやみよも梅れ来。陰うか

高野物狂

上ものゝ。惑眠。視覺ぼ。悪く。ちらひあるね。き日れ。郭の。曇りあぐ。さ世れ。恵み。後乃世うて。頼むあり〳〵

同

上ものゝ。かくり。あぐくさめ。切。御よ。御供申。御りつ。岩よ行。来ろえり。岩も

序法をひろめる。大師はめぐみありけりや。大師の恵みありけるを

菊意壹

夢もあれ。いつまでを松が根の。嵐の床まかり移して花の多へ夜もまどろむ身を寄る袖にはさはれも頼まるる。ひとり社あれひとりねの花の涙ぞ。涙あるべし

明治四十三年十一月十日印刷
明治四十三年十一月十五日發行

訂正者　觀世清廣（電話番町三百拾六番）

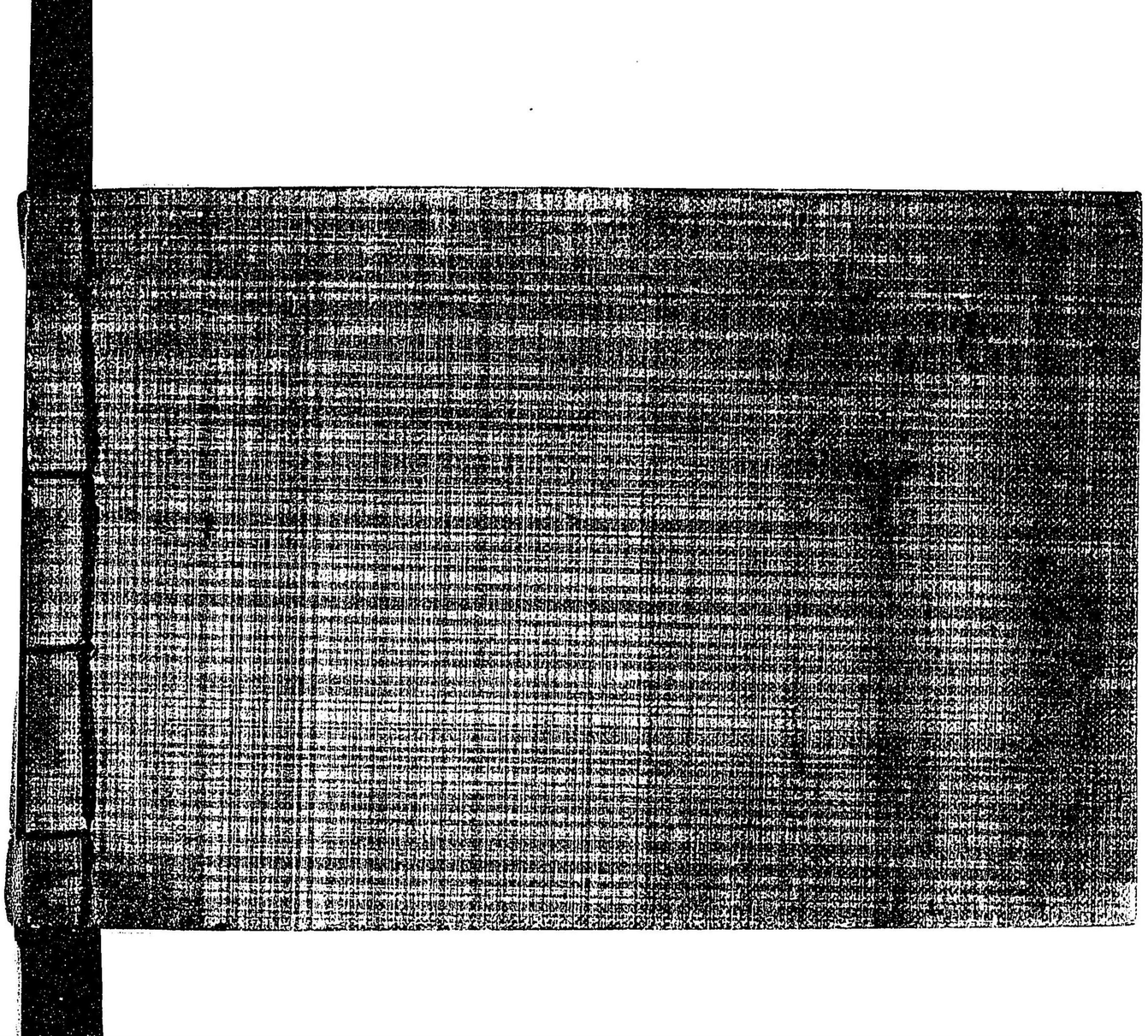
京都市上京區三條通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助（電話特二千百九十番）（振替貯金大阪三六一八番）

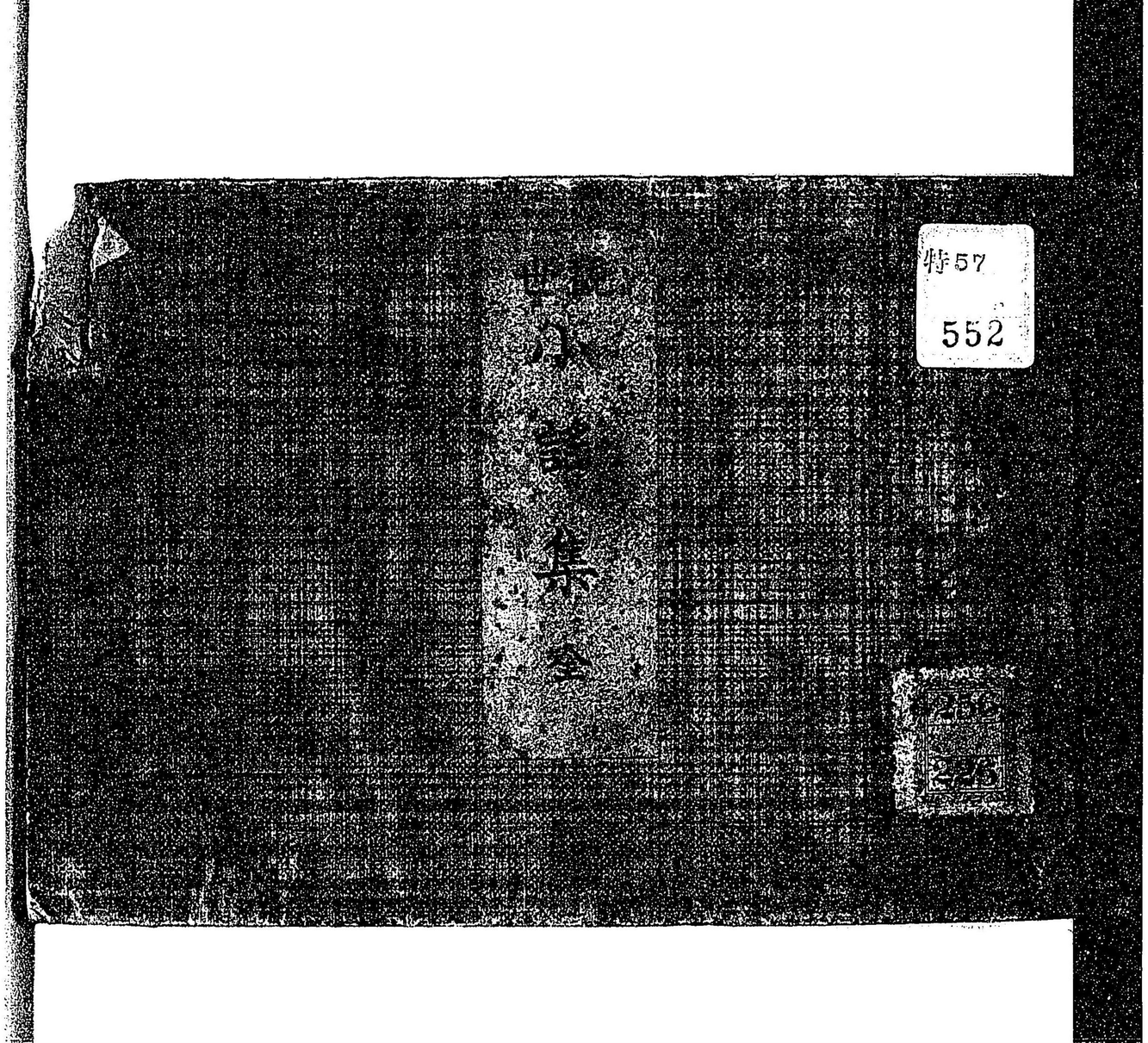
特約店

東京市淺草區新福富町十一番地
檜印刷部
印刷所　青木常次郎

256
226

謹製不許





074930-000-0

特57-552

観世小謡集

観世　清廉／訂

M43

CEL-0020